

## 16. われらの地球を救え

各務原市立蘇原第一小学校6年

藤澤 咲 大嶋 直哉 金子 幸恵

羽田野 真子 深町 彩葉 林 彩夏

↓

敦賀市立咸新小学校5年生一同

私はジュリアン。六年生です。

今日は、私のたん生日。

友達のビクトリアとたん生日会の準備をして、ハデにかざりつけた部屋でひと休みしようと、ジュースを取りに台所へ向かいました。

その時、

「ええーっ」

という大きなビクトリアの叫び声が聞こえました。

私は急いで台所からジュースを持ち、こぼさないように注意しながら、すっとんでいきました。

するとビクトリアはテレビを指さして、

「いっ、いん石がっ。あっ、あと二年から三年の間に地球にくるってっ」

「それ本当なの？」

私は半信半疑で聞きました。

「本当に本当だよお」

チャンネルを変えてもこのニュースが流れていました。

本当の本当に、いん石がくるというのです。

しかも地球の約三倍の、いん石です。あたったら、地球は、割れてしまいます。そして、なぜいん石がくるのかというと、ここ最近、地球の温だん化が進んでいるからだというのです。

このニュースに興味をもった私とビクトリアは、過去に行って地球温だん化を止め、いん石のき道を変えたいと思ったのです。

でも、どうやって過去に行ったらいいのでしょうか。

ドラエモンはいません。そのとき、ビクトリアが、

「あっ、そうだ！『何でも博士』に聞けば、分かるんじゃない？」

と言ったのです。

「あ～、そっか、今いるかなあ？」

『何でも博士』とは、私のおじいちゃん、ふだんは車屋さんを営み、服もやることもハデなおじいちゃんです。八十二才で五十メートルを九秒一で走る元気なおじいちゃんなのです。

私の家のとなりにある赤い屋根の家が、私のおじいちゃん、通称『何でも博士』の家です。

ピンポーン

「おじいちゃんいますか？」

「……バッカもーん！ わしは『何でも博士』」

「あっ、失礼しました。『何でも博士』」

「実は、相談があるんだけどね、おじ、いや『何でも博士』」

「ああ、何でも言ってくれい。わしはなんと言おうと『何でも博士』だからなあ。あっはっはあ」

「いん石のニュース見ました？」

「あー、見た見た。地球のききじゃ」

「私たち、いん石のしょう突を止めたいの。それで『何でも博士』過去へ行くタイムマシンを作ってくれませんか？」

「お前たち二人で行くというのか。よし、分かった。それなら明日この時間にまた来いよ」

そんなわけで私のたん生日会は、この事件が終わった後にということになりました。この夜私たちはドキドキして、夜十一時近くまで起きていました。

次の日、まだねたりないなかで私たちは、約束通り『何でも博士』の家へ行きました。

「『何でも博士』来ましたよー」

「おお、来たか来たか。タイムマシンはとっくに出来ているぞ。どれだけ長くいっても、実際には三十分しか行ってなかったことになるすぐれものじゃ」

私たちは、さっそくタイムマシンに乗りこみ、シートベルトをしめました。

「ピーッ。カードがそう入されていません」

「……ETCかいなっ！」

「そうじゃった」

タイムマシンの中はとてもきれいに整備されていました。

「準備は全てできた。それでは発車するぞ」

二人はずっとときどきしています。

「よいか。未来はお前達の手にかかっているのじゃ」

「発車三秒前、二、一、発車」

音もせず、いきなりまどから見える景色がブォーッと白く光ったかと思うと、すぐに暗くなりました。

「着くの、はやっ」

私たちはタイムマシンを降り、あたりを見まわしたが何もありません。

「へえー日本って、ちょっと前まではこんな所だったんだー」

と私が言うと、

「そんなはずないわよ。こんなに人気がないなんて絶対おかしいわ。虫もいないなんて。どう考えたってヘンだもん」

とビクトリアが言ったのです。

「ってことは……」

「私たち未来に来ちゃったんだ！」

「えっ、なんで？」

ビクトリアは、全く分かっていません。

「だからさあ、いん石が落ちてくるんでしょ。とてつもなく大きな」

「そのしょうげきで、きっと全ての生き物が絶滅つしちゃったのよ。だからこんなに不気味で暗くて、地面がひびだらけなのよ」

今の説明でビクトリアにもやっと分かったようでした。

急いでタイムマシンにもどり、今が何年か見てみると、

「えっ、うそ！ 三千八百七年」

「ど、ど、ど、ど、どっとうしょ～～。どうやってもどるんだよお。全く分かんないじゃん」

ビクトリアは、ついに泣き出してしまいました。

「だいしょうぶ。歩いていけばきっと何か発見があるわよ。ここにずっといたって、何も変わらないでしょ」

あてもなく歩き始め、しばらくするとビクトリアが、

「ねえ、ジュリアン、不思議に思ってたんだけど、地球の三倍のいん石が落ちたんでしょ。それなのに、なんで地球はバラバラにならなかったのかな。それにちゃんと地面を歩くことができるんだよ、なんでかな？」

と私に聞くのです。

「地球には引力があるからじゃない」

私はあせって冷たい言い方をしてしまったのですが、ビクトリアはかんちがいして、

「何よその言い方！ いっつも自分のことばっか考えて！」

と言うので私も言い返しました。

「何よ、いいじゃない。いつもわがままなんていってないじゃん」

こうして私達はおたがいをにらんだまま、別の道を歩いていきました。(あっ、道はなかったね、別の方向へでしたね)

「ビクトリア、悲しんでるかな？」

私がちょっぴり反省したその時、悲鳴が聞こえたのです。

あれはビクトリアの声です。悲鳴の方向に急いで行ってみると、そこにはとてつもなく大きな怪物が、ビクトリアに近づいていたのです。

(危ない！ ビクトリアが殺されてしまう！ ビクトリア危ないよお～～！)

そう思ったしゅん間、目の前が真っ白になり、私はきぜつしてしまったのでした。

「ここはどこ——」

私が目をさますと、そこにはビクトリアと、とてもきみの悪い生物がいたのです。

さっきの大きな怪物が、きみの悪い生物に変身したのです。

このへんてこな生物は金星にいたけれども、だれもいなくてさみしいので、たくさんの生物がいるというウワサの地球にやって来たそうなのです。

「この子は、物をなおす魔法もつかえるんだって」

ビクトリアは目をキラキラさせながら、へんてこな生物にいいました。  
「ねえ、このタイムマシン直してくれる？」  
出た！ ビクトリアのうるうる光線！  
(でも、いくらなんでも、他の星の生物には、きかないでしょ)  
と置いていたら、  
「うん、まかせて！ キミのためなら、なんでもするよ」  
と、はりきっているのです。  
うわっ、きいてるし！ あきれた。  
「できたよ〜〜〜」  
すばやさとその技術に感心していると、  
「ジュリア、みてみて〜。すごくかわいいでしょ」  
ビクトリアは、最近人気のツーエックスのレインボーブーのキーホルダーを見せたのです。  
「これね、さっきの子が変身したんだよ。一緒に連れて行ってほしいって」  
「このキーホルダー、どこにつけよっかな♪」  
と、はりきっています。  
さあ、ついに過去に行けるのです。いろんな意味でバンザイ！

次のしゅん間、私たちは町のような所に着いていました。  
「ここ、ひょっとしてアメリカ？」  
そう、私たちは日本ではなくアメリカに着いたのです。  
でも着いたことはいいけれど、ここがどこだかわかりません。  
ビクトリアはのんびりと、  
「だれかにきこう」  
と言うのですが、ここは日本でもないし、私たちがしゃべることが通じるかどうかわかりません。ビクトリアは、  
「英語を練習しとけはよかった」  
と、あいかわらずのん気なことを言っています。  
とりあえず、この辺を歩いてみることにしました。  
まわりを見ると大きい建物ばかりで、目が回るほどです。  
ビクトリアは、  
「すごい建物ばかりだなあ」  
と感心するばかりです。私たちはまわりの様子にあっとうされて、すっかりいん石のことを忘れていたのでした。

その日はビルの空き部屋で、ビクトリアと私は大変な一日を終えました。  
次の日も、朝から大変なことが起こりました。  
ビルの出口がわからなくなってしまったのです。  
迷いに迷って何とかビルの出口を見つけた時、ビクトリアがあたり一面にひびきわたるような声で、

「やった～！」

と声をあげたのです。

でもその喜びもつかの間、その声を聞いたビルの人達がおどろいて、こっちの方を見ながら近づいて来たのです。

（どうしよう、つかまってしまう）

と思った時、

「行くよ～！ ジュリアン！」

ビクトリアは急に私の手をつかみ、出口にむかって走り出し、とびらをあげ、外に飛び出したのです。

なんとか無事に外に出た私たちは、タイムマシンのかくし場所にもどって食事をとると、ここに来た目的をやっと思い出したのでした。

「ねえ、ビクトリア。どうやって、いん石のしょうとつを防いだらいいと思う？」

「地球温だん化が原因って言ってたけど」

こうして、私たち二人とキーホルダーになったきみような生物は、地球を救う冒険の旅を続けることになったのです。☆

タイムマシンで、とりあえず私たちは現代の日本に帰って来ました。

「アメリカでは言葉が通じなかったから、やっぱり日本がほっとするわ」

でもほっとしている場合ではありません。

私たちは地球温だん化を止める方法を考えました。

でもどうしたらいいかわかりません。どういう理由で温だん化になったのかもわかりません。

私たちはだんだん不安になってきました。もしここで失敗すると、未来がもっともっと悪くなるかもしれない……。

そこで、もう一度何でも博士に会いに行くことにしました。

「タイムマシンの調子はどうかね？」

「……うん、まあまあよ。ETCがついているから安心よ。ナビはないけどね～」

「ところで、地球温だん化を止めることはできたかね？」

「……それが」

私たちはこれまでのことを、全部話しました。

「ふうむ。そうじゃったか…。よし！ 少し待っておれ！」

そう言って、博士はとなりの部屋に行って、何やらゴソゴソ探し始めました。

「おっ、あったぞい！ これは昔、わしが発明したパソコンじゃ。これは何でも答えてくれるのじゃ」

「ってことは、これに『地球温だん化』って入れれば、原因がわかるってこと？」

早速パソコンを使って調べてみました。

二酸化炭素が多くなったことや、木が少なくなったことなどの原因がわかってきました。

ところがすぐに解決する方法が、やっぱり分かりません。

「うわぁ～。私たちに何ができるんだろう……」

「まあ、とりあえず原因は分かったんだし、もう一回過去に行ってみようよ」  
相変わらずお気楽な、ビクトリア。

いよいよタイムマシンに乗って、過去にやってきました。

そこはきれいな海と砂浜が広がる場所でした。

「うわっ～！ やっぱり現代よりもすごくきれい！」

「これが、いつから汚れちゃったんだろうね」

とりあえず情報を集めに町に出ました。ところが町に出てみたらびっくり！ 辺り一面にゴミが落ちてたのです！

「何これ？ いろんなゴミが落ちてるよ」

「この時代の人たちは、町にゴミが落ちていても平気なのかな？」

「う～ん、何だかよく分からないけど、とりあえずゴミを拾ってみよっか」

ビクトリアは、近くにあるゴミから拾い始めました。

私も仕方なく拾い始めました。

「うそ！ 何でこんなものまで落ちてるの？」

使えなくなった茶わんや、ボロボロで着れなくなった服なんかも落ちてました。

拾い始めて二時間ぐらいたちました。

辺りはだんだんきれいになってきました。

「やっぱりきれいなのがいいよね」

そこに私たちの様子をずっと見ていた町の子どもたちがやってきて私たちにたずねました。

「お姉ちゃんたち、さっきから一体何してたの？」

「やっぱり自分たちの住んでいるところは、自分たちできれいにしていかなきゃ。それに、きれいになると気持ちがいいしね」

その後、子どもたちは、そのことを町の人たちに話して回りました。そして周りを見ると、いつの間にかたくさんの人たちがゴミを拾っていました。

「見てよジュリアン！ 町の人たちがみんなゴミを拾っているよ」

「ホントだね。これからも自分たちの町は、自分たちできれいにしていってほしいね」

そのしゅん間です。

ポケットの中のキーホルダーが、キラリと光りました。

そして空を見上げると、大きなにじがかかっていた。